



可認物便郵種三第省信遞日六十二月二十年一十三治明  
行發日五十日一回二月每 行發日一月七年五十三治明

政教時報

# 政教時報

第十八號

## 論說

英國及其宗教界  
學生寄宿舎に就て

（社説）  
片山國嘉

## 社會

◎精神上の苦悶者◎同仁會◎ダンマバトラー氏  
◎吳汝綸氏◎女囚携帶の乳兒保護會◎閑文字  
女囚携帶兒の別房等

（海外時事）

## 雜錄

ミルトンの隠れ家、ヘンの會堂

近角常觀

## 視察

基督教慈善事業の發達

池山榮吉

## 信界

呻吟語

眞岡湛海

▲教界彙報▼

## 古今

チンツェンドルフ伯

待山生

▲社會小觀▼

### 英國及ひ其宗教界

#### 政 教 時 報

英皇戴冠式は、今や全世界より派遣せられたる代表者環視の中に莊嚴なる儀式を以て舉行せられむとす、式場は是れウエストミンスター寺院、英國帝王、政治家、詩人、文人の眠れる該伽藍は、テームス河畔に矗立せる上下兩院の高塔と相待ちて彼が尊大の氣風を發揚するなるべし。

曩きに女皇ゾイクトリヤ祝賀祭の時、セントポール寺院に嚴肅なる禮拜を行ひ、今又歴代の慣例に従ひ、式をウエストミンスター寺院に擧ぐ、吾人は英國民が志操堅實、常に歴史を貴び、慣例を重んじ、其の行動毫も輕佻浮薄の嫌なく、宗教に於ても國家に於ても、頑として其地歩を占むるを見て私かに其自信力を多とするなり、抑彼英人なるものは、頭腦冷靜、詳かに利害得失を打算して徐るに手を下すを常とす、一たび手を下すや、意志頗る強健、向て取らざるはなく、望んで達せざるなし、たとひ百千の頓挫に遇ふと雖、決して彼は避易せざるなり、彼は理論に拙し、然れども克く實行する者也、彼は頗る迂濶なるが如し、然れども結局遂行せしむは止まず彼の爲す所、頗る不理屈千万なることあり、されど事實に於

#### 大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し、品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし、國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を奨励し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査する事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奨励して、善良なる家庭を形作りしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を奨励する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむる策を講ずる事。

て其結果を擧ぐ、彼等の相戦ふや、衝突血を流し、火花を散らず、而して大軀に於て兩者綜合し來りて、圓滿なる結果を持來たせり、彼の佛國民を見ずや、彼時として熱情火の如く、神託人を動かすが如きものあり、奇材天授、鬼神の出沒せるが如きものあり、一見快は乃ち快なりと雖、其結果常に散漫に失するの憾あり、而して英の之に對するや、常に秩序的方と耐忍不拔とを以てし、遂に能く之に打勝つを見る、佛にチアンゾアークあり、而して之を燒きたるもの英兵にあらざや、佛にナポレオンあり、而して之を流したるもの英人にあらざや、以て如何に英の佛に異るかを知るべき也。而して此英國民の性質は亦宗教界に於て現はれたり、看よ、彼は一方に於ては多數の新思想を生じ、自由教會を起しつゝあると同時に、國家全体としては國立教會を立て、監督制を守り千古儼然としてアンゴロサソンの運命と共に、益々其の光彩を放ち、今や其教會伽藍に即位式を舉行して、大ブリテン及疆域中日没する事なしと誇稱する印度、濠洲、加奈陀を始めとして、全世界に散在せる大殖民地に君臨せられむとす、吾人は茲に聊か彼か宗教界を論じて、其特性を検せむと欲す、是れ制度組織の是非を論ずる爲めにあらず、國立教會にせよ、自由教會にせよ、如何に彼國民が實地經營の點に於て成功せしかを示さむと欲する也、

十六世紀宗教改革の當時、英國教會の獨立分離を促したる

動機ほど滑撃なるはなく、不理屈なるはなし、ヘンリー八世は初め、ルーテルに反對して、羅馬教會を辯護し、法王より信仰保護者の名を賜ふに至れり、然るに法王ヘンリー八世の離婚事件に異議を挟むに及びて、忽ち羅馬教會より分離して、英國教會を獨立するに至れり、其原因は此の如き不理屈千萬なりと雖、實際上に於ては羅馬教會組織の儘を變更せず、單に法王の主權を認めずして、之を國王の權に歸して勢力を固むるに至れり、此に於てや舊來の監督制を其儘踏襲し、全國統一の實を擧ぐるに於ては、却て獨逸の宗教改革に優るものあり、抑獨の宗教改革はルーテルの信仰と反對によりて舞臺を開きたるものにして、諸侯は之か援助の地位に立ちたるもの、之を英王が單に政治的に分離せるに比すれば、宗教としては、たしかに眞面目なり、されど事實に於ては如何、ルーテルに對立してカルビン派起り又新教全体に反抗して羅馬舊教の反對改革起り、遂に獨逸各州、教派を異にするに至れり、其餘勢今日に至り、獨逸帝國は、新舊兩教其勢力を折半して、國家全体としては頗る統一を缺き、最も困難の状態に陥れり、英國教會は分離の原因は此の如く俗なるにも拘はらず、爾後の經營に頗る力を用ゐる、教會としては遠くセント、オーガストンよりの使徒相承を主張し、信條教制を定め、確然として容易に變更を許さず、特に國家は國民全体の健全なる宗教的分子をして其要衝に當らしむる故に、宗教界は優に他の部門

に後る、なく、着々功果を收めつゝあること、恐くは歐洲第一に位するなるべし、是不理屈千萬なるも事實に於て成功すと謂ふ所以也。  
 分裂の形式此の如く俗なるを以て、英國宗教界の内部信念の猛烈たりしを忘るゝ勿れ、宗教改革の先驅者として先づ叫を擧げたるもの實に英人ジョン、ウヰクリフとす、彼は十四世紀の中頃既に『羅馬教會の末路』と題する論文を草して、先登第一反對の矢を放ちたり、彼は全英教會の大部をして彼に一致せしめ、バイブルを翻譯し、宗教改革を宣言し、神學教授として教會の罪惡を講し、羅馬廳より逮捕禁錮の命令を受けたり、然れども彼はカンタベリー教區を初め、英國貴族の同情を受けたり、彼は遂にローランドと名くる敬虔篤信者の會を組織し、全英を周遊して説教傳道に熱中せり、遂に裸の辱を受け、死後四十年、屍は發掘され、異端者として禁かれたり、後年十五世の初、ホヘミヤ、フライング大學に於て、ウヰクリフの説大に感化を及ぼし、ヨハン、フスをして、殉教の烟の中に叫ばしめて曰、今や我か眼を燻ふるの黒烟は他日炎々として莊嚴なる教會を燒盡し去るべしと、果然十六世の初め、ウヰツテンベルヒより響ける叫は、全歐の山川草木を震撼したりき、以て英に於て如何に早く宗教改革の新生命か勃興しつゝあるかを知るべし。  
 ヘンリー八世去りてエリザベス女皇來る、歐洲宗教改革の

歴史は實に血を以て飾られたり、然れとも新舊兩教の衝突は英國のエリザベス、蘇格蘭のメリーの二女性を驅りて、空前絶後の慘憺たる悲劇を演ぜしめたりき、是より先き、蘇格蘭の宗教改革者ジョンノックス大陸に遊び、カルビン派を學び、故國に歸りて革新の事に従ふ、舊教漸く滅びて長老教會の組織を得るに至る、而して英國に在りては、エリザベス、勝に乗じてゼンエイトを禁じ、ユーゲンを迎合へ、三十九條を確定して監督教組織の基礎を固くし、他教派を遇する頗る酷也、遂に十七世紀の中頃、英人武骨漢の標本たる、オリバー、クロンウエルは劍を揮ふて下院の門に臨めり、此に英國王國の歴史は忽然として一條の溝渠を穿たれたり、然れとも此溝渠たるや最も清濁なる流れを以て洗はれたり、クロンウエル壯年の頃過激なる神經病に罹り、憂鬱暗澹、天上冀望の星辰は其影を隠し、人生茫茫たる深坑は、長へに蒼穹悠遠の光明を蔽へり、カーライル賛して曰、憂愁は貴尊の倒影也、失望の深さは冀望の高さを量るに足る、宇宙に充つる地獄の黒烟は真心の力を以て天上に溢るゝ炎と光輝とに變化し得べしと、果然、クロンウエルは此際より森嚴なるカルビン主義の信仰を抱きて回天の事功を奏せり、然れども彼は英國政教界に於ける一瓶の激藥、一服の防腐劑たりし也、電雷耳を劈くの聲は清涼なるオンソンを發して英國教會の青山を洗ひ去れり。

十八世紀の初、ウイラム、ローの『眞面目なる招喚』と云へる小冊子は英の信仰界を蘇生せしめたり、サミュエルジョンソン曰く予が此書に接する迄は予は宗教に對して放縱なる談客に過ぎざりき、予の牛津に來りし時、此書を以て普通の無趣味の本なるべしと思ひつゝ、一讀始めて宗教の熱心を抱きたりと、遂に此本はウエスレー兄弟及其同志を驅りてメソヂスト運動に奔らしめたり、是れ外界に於ける經濟工業の發達は、宗教に向て社會的救済の必要を促し來りたるものにして、傳道に、教育に、慈善に、嚮然として社會事業は其の枝を張るに至れり、而して此等の主義は遂にメソヂスト教會を作りしも又英國教會の氣風を刷新するに大に與りてあり、遂にオーウェンに至りて其極端に達し、勞働問題を講じて、職業聯合を生ずるに至れり、  
 十九世紀に至りて二個の思潮は歐洲の天地に漲れり、一は前世紀に於ける自然科學に對する思想の反動として、儀式を重んじ、音樂を愛し、すべて教會を舊教化するものにして英國教會内にて高教會運動と稱するもの也、ニューマンの如き遂に斷然として舊教の門に入りてカーテナル職となるに至れり、數年來ハリハックス伯を中心とせる儀式の運動の如き、亦是著しきものにして、僅かに香を燒く可きや否やの問題の爲め、年々國會議場に於て火花を散らして大討論あり、又他の思潮は現實主義に社會の實際に向ふもの、英國教會内に於

て、廣教會運動と稱するもの也、而してモリスのトエン  
 ビー、ホルルの如きは其極に達するもの也、蓋し十九世紀は  
 社會民主主義勃興の時代なり、而して其思想や、佛に、獨に、  
 益々勢力を得て、國家を排し、教會を排し、其勢猖獗也、然  
 して獨り英に於ては危険なる思想未だ他の如く行はれざる所  
 以のもの、慥かに教會内外に於ける社會事業施設の完全  
 せる反影たらずんばならず、吾人は温厚なるデョーシウ井ル  
 ヤムの容貌に接して初めて世界到る處に青年會の成立する所  
 以を知り、刺戟するゼネラルブリスの辯舌をきいて、救世軍  
 の擴張せる偶然ならざるを知る、而して此等幾多の運動は教  
 會の内外に通じて社會的改良の結果を奏すること洵に大也、  
 吾人他日編を改めて一々之を紹介するを得む。  
 此の如く論し來れば、英國國民は何れの主義にまれば、頗る眞  
 摯なる態度を以て問題を解釋し、大となく、小となく、全幅  
 の精神を捧げて之に着手する、所謂獅子兔を搏つに全力を用  
 いるの概あり、宗教界の如き最も著しく其特徴のあらはるゝ  
 を見る、而して國民全体として頗る沈着の性質を有し、一步  
 々々地盤を踏みしめて足を運ぶ趣あり、故に時代相當に幾多  
 の運動ありと雖、僅かに其缺點を補ふに止りて、決して輕卒  
 に根本的に顛覆して、其組織を變更することなし、佛の如き  
 時としては一時激越の情に乘りて大破壊を行ひ、朝三暮四方  
 針動搖甚しきことあり、獨逸の如き理論に走り、空想を抱き、

徒らに整頓を期し屢々改革を布きて、却て實際に親しからざ  
 るの弊あり、獨り英に至りては弊あれば乃ち改め、害あれば  
 乃ち去る、恰も障子の破るゝや忽ち之を補綴し全体に於て大  
 きに張り換ゆるの必要なが如し、英の宗教界亦此の如し、  
 是れ常に眞著なる改良を経つ。猶其組織に於ては宗教改革當  
 時の國立教會制度を堅持する所以也、予倫敦に在るの日、毎  
 日曜諸種の自由教會を訪ふ、各其特徴ありて信者皆眞面目に  
 之を行ふ洵に奇觀也、而して此等の自由教會が自由に游泳し  
 つゝあるに拘はらず、英國教會の大海は毫も其深淺を變せず、  
 是れ英國教會が千古其態度を改めず、其地歩を占むる所以也  
 今や英皇戴冠式のウエストミンスター寺院に舉行せらるゝ  
 に際し、感最も深し、我國今や最親同盟國として幾多の人士  
 其典に列せらる、冀くは其見るべきの所を見、翻て、我國と  
 しては我が歴史に則り我が特徴を發揮し我堅持すべきの要點  
 を察し、我國將來の宗教經營に資せられむこと切望に堪へざ  
 る也

### 學生寄宿舎に就て

片山 國嘉

都下十萬已上の學生ある中、適當なる寄宿舎に居るものは  
 僅かの割合にして、其大部分は下宿屋に住居するものである、

而して下宿屋に居るものの中には、適當の監督者なきため、  
 ついゝ外界の誘惑の爲めに身を持ち崩して、初志を貫徹せ  
 ぬものが随分少くない、これは個人の上よりみるも、又國家全  
 體の上よりみるも少からぬ損失である、抑も田舎より修業に  
 出るものは既に相當の目的を有し、又父兄たるものも其成業  
 を樂むで出すのである、且つ本人は頗る健全なる空氣の中に  
 質朴に育て上げられたるもので、言はば無疵の玉である、然  
 るに不幸にして監督宜しきを得ざる爲め、嘗て期したる修業  
 の望を達せざるのみならず、甚しきに至りては却て怠惰優柔  
 なる習慣を養ふが如きことあらば、本人は勿論指を屈して成  
 功を樂んでる父兄の爲めに氣の毒千萬である、又國家全体の  
 上より云へば、社會の各部門に働かへき健全なる人材となる  
 へき學生が相當の學費を費し乍ら、豫期するどころの健全な  
 る分子とならずして、甚しきは不健全の分子となりて、社會  
 組織の間に食ひ込み、他の健全なる部分までも腐蝕せしむる  
 様なことあらば、國民全体の上に於て非常なる不利益であ  
 る。

さて此の如き大なる社會の損失が常に繼續して行はるゝと  
 云ふは非常に残念な次第である、又其事を明らかに承知して  
 居乍ら、適當なる救済の策を講せぬは不親切の極といふべ  
 し、予の考にては之を救済するは眞正なる宗教家の仕事で  
 ある、眞正なる宗教家には左程困難なことではない、彼の不

健全なる下宿屋に代ふるに健全なる寄宿舎を以てすべし、さ  
 てその寄宿舎の組織如何と云ふに、必しも廣大なる建築を要  
 せず、必しも究屈なる規則を要せず、否、寧ろ煩はしき干渉と  
 形式的作法とを避けて、學生に適當せる便利と親切とを與へ、  
 殊に其家婦たるものは慈母の我が子を育つるといふ心持にて  
 萬事に就きて十二分の注意を加へ、自ら其寄宿をして和氣調  
 々たる家庭たらしめ、學生をして、快樂を他に求むるの必要  
 なからしむるは最も要義とする所である、して此の如き寄宿  
 舎の設立は何人の任務なるか、予は確かに是れ、宗教家に恰  
 當せる社會事業の一なりと思ふ、抑、宗教家の任務は人世の  
 救済にありとすれば、此等の救済は、個人の上より見ても、  
 社會の上より見ても大救済である、救済と云へばとて、從來  
 の如く、單に説教若くは講義を爲て口のみ説くばかりでな  
 く、人生の最も缺けたる點に向て相當の設備を具へ、善良な  
 る學生の墮落を未然に防ぎ又一方には其父母に安心を與ふる  
 が如きは、たしかに佛の救済と云へる意味の本義を自覺せる  
 ものと謂ふべきものである。

諸如何にして之が設備を爲すべきや、如何にして其資本を  
 得べきやと云ふに、予は決して之を六ヶ敷き事とは思はない、  
 先づ設備の如き通常の下宿屋と殊に異なるを要せず、勿論完全  
 に出來得る限りは完全にしたきものなれど、必しも有形的設  
 備を主とせず、してみれば家屋も通常の構造にて差支なし、

且つ其家の大小と室の多少とは時と場合に應じて定めねばならぬ、かく考ふるときは之に利用すべき家の見附かり次第、之を購買する資本を出金する人と、之が監督に當ることを求むればよいのである、予以爲らく、前者は之を信者に求むべく、後者は之を品行の正しき、迷信なき僧侶若くは相當の修養ある信者に於て求むべし。

從來、宗教上の寄附をなすには、何事にせよ其趣意を賛成して、其資本總額中に喜捨する方法が多い、されど又其事業の一部を一人若くは數人にて引受くる方法も又頗るよし、例せば外國に於て孤兒院若くは感化院の設立をみるに、家族制をとるものは、二三十人を一棟に住せしめて之を一家庭とす、而して其各棟は一個人の遺產寄附より成立せるもの多くして、紀念の爲め、其棟々に寄附者の名を附けて置くことあり、今も同様の方法にて適當の家屋ありたる時、信者の或者が之を引き受けて購買寄附することせば、寄附者の好意を記憶する上に大に便利にして、且つ寄附の増加に従て、漸次に各所に寄宿舎が増加することになるであらふ、次に之が監督者即ち寄宿の主人たるべき人は、決して學問を要せず、口辯を要せず、唯よく、親切にあればよし、例へば、此頃時事新報社に於て行ひつゝある慈善旅行の監督者の如し、今日の宗教界随分不完全なりと雖、猶深く注意せば此種の一部の仕事に當りて、眞面目に其任務を盡す人多からむ、而して前に既

社 會

精神上的の苦悶者

苦悶するものにして安慰を得べし、自己の根柢なきを自覺して、始めて堅牢なる地盤に立ち得べし、空氣の淡にして此人に向ては苦く、土を管めて毒を味ふの感あり、宇宙暗鬱として光輝なく、人情冷却し去りて、語々蠟を嚙むが想あり、窓外雨濛々、孤坐朽机を擁す、正さ、是れ求道の好因縁にあらずや、近時這回の苦悶者を社會上に見ると益多し、抑々社會の逆流は人を襲ふて此苦境に陥らしむるか、人心の秘奥は自ら其要求を強め來れるか、吾人は慥かに想ふ世界此の如き眞面目なるものあらむや、人間此に至りて最終の命脈を示せるもの、一生一死、暗淡たる深坑、暗々たる青天、人生の運命を定むる此時に在り、吾人彼か乾燥せる胸裡に向て、一掬同情の涙を灑かざるを得ざるなり、人間同情の涙は猶乾燥すべし、佛陀慈悲の涙はたしかに彼等飢餓の胸底を満足せしむべき哉、佛陀引攝の手は必ず孤影寂然依るなきの身を護るべし、苦悶なる哉、苦悶なる哉、苦悶はたしかに閉されたる大安慰の門を開くべき秘鑰也

同仁會

清國に對する刀圭社會の同情は遂に此の如き高尙にして至

に記せる如く監督者は夫婦とも父母に代りて親切を主とし、可成愉快なる家庭を作りて、學生に窮蹙の感を避けしむべし、特に寄宿費の如きは實費已上に出でざることをとし、經濟の如きも組織の全体より割り出して、各寄宿舎同様とし、中央部を設け連絡を保つべし、而して監督者の如き其中央部より適當の人を選びて之に托することなし、相當の手當を拂ひ、直接損得を感ずること下宿屋主人の如くなる弊を避けて營業的に陥らず、又一方には慈善的に陥らざる様注意せねばならぬ。

已上は予が學生寄宿舎の必要を感じて宗教家及び信者の有志諸君に望む所である、各地の父兄は其最愛の子弟を放ちて、誘惑多き都府に遊ばしむ、其心配の多き察すべき次第である、全國各地の父兄何れも其家庭は佛教的なるもの多し、若し其家庭と都府に於ける新家庭即寄宿舎との間に連絡を通じ、監督者即ち新家庭の父兄は其實家父兄に報ずるに其子弟の現狀を以てし、又適當なる子弟の冀望を取り繼ぐに至らば、雙方の爲め、其便利洵に少からざることであらふ、已上の所説は單に消極的の方面よりし、利益の最小限を以てしたり、猶其監督者の人格と設備の完全とに比例して積極的利益の多きことと言ふ迄もなし、聊か簡易なる方案を陳して佛教僧侶及信者諸氏に訴ふ、要は、一日も早く實行に着手せられむことを望むのである。

大なる會合を結ばしむ、人歎亡ありて始めて満足を感じ、人病ありて他の厚意初めて感すべし、個人既に然り、國家社會亦然らざるならむや、馬關に李鴻章傷を得るや、我國手か親切なる治術は彼をして心を開かしめたるにあらざるや、我今清國の蒙を啓かむとす、必ずなかるべからざるもの也、西人の醫を支那に傳ふるもの多くは傳道的手段なりといふ、是大に不可なり、須らく人道の立脚地より彼の病者を救ふべし、而して夫自身か生ける宗教と謂つべき也

ダンマバーラ氏

滞在月餘到處活動的佛教を説く、洵に可なり、然れども活動何れより來るか、何物か活動の動機なるか、吾人は信仰は洵に其源泉たるを知る、我國の佛教たしかに此點に於て一の長所を見る、氏冀くは其機微を察して之を故山に齎らし、以て理想的の解釋にのみ心酔して、死木枯灰の如くなれる印度佛教に點するに一點の生命を以てせよ、切に望む、

吳汝綸氏

清國の大儒吳汝綸氏、今回日本教育制度を視察せむとて來る、氏たるもの其任大ならずや、今日の清國を開發するに於て最も急務に屬するは、教育を措て他にあらざる也、凡そ一國の文物を視察せむとせば、徒に其外觀にのみ馳せずして其裏面をも審みせざるべからず、況や人の精神を支配する教育事業をや、吾人の同氏に望む所亦此點に外ならざる也、

民たるもの希くは我國の精神的教育に着眼し、氏が多年の經驗と相合し之を現時の清國に献策するを得ば、清國將來の教育上に一大革新を促し、以て清國文化開發の源泉たるを得ん哉、吳氏幸に自重加餐せよ

女囚携帶の乳兒保育會

外國監獄署にては、女囚携帶の乳兒の爲に別室を設けて町重に保護を與ふることは別項「海外時事」欄に記載したるが如し、我國にては今回福田會發起となり、保護する計畫ありと、新聞紙は左の如くに傳へぬ

歸ある母に抱かれて東西分かぬ嬰兒の浮世に遠き檻倉内に閉込めらるゝ者少なからぬ斯くの如きは宛も空しく染み易き白糸を汚濁の中に投ずると一般なればとて麻布福田會にては世上慈善家の贊助を得て斯かる不幸に沈淪せる女囚の携帶乳兒を引受け養育せんとを思立ち之を藤澤典獄に謀りしに同氏も深く同情を表して夫々斡旋する所あり同會司事佐野尙氏は之れが爲め目下奔走計畫中なりと云へば遠からず成立の運びに至るべし

と洵に美譽といふべし、吾人は一日も早く其計畫の熟せられんことを望む

閑文字

この間萬國郵便聯合廿五年の祝賀として紀念の爲め、逓信省より紀念給葉書を

海外時事

六枚一組として發賣せられた、實價は壹錢八厘位かゝらうである、それを五錢に賣たのもよとして、意匠があまり感服せぬのに紙質や印刷までも甚だまづいうしておまけに歴史上有名な楠公の姓氏を脱落して書いてあるには下り毛恐れ入た、太平記や山陽の外史には楠正成と三字の姓名を記してあるは、先滑稽であるのに、史學の考證開けた明治の今日、間違である外史杯をまねて楠正成を三字に記すは堂々たる逓信省の耻辱であると思はる、國史眼をばすめとして近頃は教科書に至る迄大抵楠木正成と四字に記してある、河内の觀心寺は楠公の菩提所ゆへ公の消息文を藏して居る由なるが、楠木正成の四字に署名してあるううである、僕に將より歴史考證家でも何でもないのであるから、只きいたまひ、茲に記して置くのである、誤なしとも限らぬ。

▲これも逓信省の事に關した事であるが、矢張此間の祝賀會の時に、郵便事業開始して方の切手を集めて陳列したが、三枚丈下りしても集らぬ、或人が其中の一枚を所有して居るから、買れさ云ふても買らず、借せさ云ふても貸して呉れず、さういふ仕方なく三枚共模造することになつた、所が工合能く模造が出来ないので大に困つたさうである、なぜ模造が出来なかつたかといふに、技術があまり發達し過たので昔の通り下手に出来なかつたからであるといふ話、頗る愛嬌のある話ではないか。

◎女囚携帶の別房 英國の「ストラブス」監獄署にて始めて女囚携帶の乳兒の爲めに別房をつくらたか、是か頗る好結果を奏したので、英國の稍々規模の大なる監獄署では將來皆此の乳兒の爲め別房を造くるとに決議したさうである、借此乳兒の室房は極めて日常のよき二つの室より成り立ち、室内には眞鍮の寢臺か据へ付られ、壁には美しくしき油繪(お伽話の模様を畫けるもの)をかけ、其他人形やゴムマリ等の多くの玩具を備へ置き、兒童をして自然にをもしろみを引き起さしむる仕

組になつて、組織は最も整頓してあるさうだ、從來英國の監獄では乳兒は全く母親の手に一任する仕組であつて、若しも女囚徒が服役中に分娩するか、或は生後九ヶ月以下の乳兒を携へて入監した場合には、他の囚徒の如く勞役に服することなく、重もに自分の子供を世話することになつてゐる、一日二度短かき散歩時間を與へられてゐるけれども、日當りや空氣の流通のよき此の兒童の監房とは九て比較は出来な

ソコデ此の「ストラブス」の監獄では、其乳兒の母親に對して子供を分離した結果、他の女囚と同様の仕事をすることゝし始めて刑の目達か達せらるゝことになつた、母親か働いて居る間は子供は別監房にて經驗ある母の手によりて十分に監督もし保護もしてゐるから、母親にとりては少しも心配な事はない、時としては極く品行の正しき女囚を選て此役を命せることもある、此母の事は子供に毎日必要なる食物を與へ、入浴をとらし、十分に運動せしむることである、又子供の爲めには一つ／＼柳で作つた搖籃か設けられて、其中で夜分になると母親の監房で一所に眠るのである、夏期になると日蔭の涼しき處に毛氈を敷いて、其上に子供を遊はしむる方法をとつてゐる、晚餐後三十分を過れば母親の監房に連れて行、若し翌朝母親か前晩に子供の保護か行き届かない形跡の見ゆるときは譴責を喰ふのは勿論である、中々子供の保護

か行き届いてゐることはわかる

最も子供は生後十ヶ月間迄は監獄署で預る規定であるが、それ迄に母親の刑期か満たないで引受人なきときは、養育院に送ることになつてゐる、この事は如何にも好結果を奏したものと見え、獨乙でも一般の監獄に之を採用することを決議したさうである、我國で女囚携帶の乳兒保育會か起されるといふ事だが洵に美譽であるが、若し乳兒保育會の設けなき土地にては、監獄署に此の制度を採用したならば結構であらふと思ふ。

◎ピスマルクの齒 最近の獨逸齒科雜誌にこういふ事が書いてあつた、ピスマルクは老年に至る迄齒が一本も抜け落ちたことなく、うして齒の痛みに悩まされたこともなかつた、只一度齒がわるかつた時、それが齒に關係したせいではなかつたか、齒科醫に診察させた、併しさうでないことが認められた、八十三才に至る迄この老翁が完全の齒を保つたといふことは珍らしき事柄であるといつてあつた。

◎トルストイ伯の書簡 伯自身が重病に罹たさき、露國農民の最も憐むべき状態を手紙に認めて、露西亞皇帝に送つた伯は皇帝を呼ぶに決して陛下といはない、汝親愛なる兄弟といふ語を用ゐた、ううして此手紙は正しく皇帝の手についた。

其の意味はアレキサンダー二世の時(奴隸制度廢止)より論じて、單に奴隸制度廢止した斗りでは十分に此問題を解釋したものと云ふことは出来ない、今や農民は正當の權利を要求して居る、之に對して十分に耳を傾けて貰はねばならぬ、此農民を救ふは卿より外に助くる人はない、若し卿の意志を妨ぐる卿より勢力の強きものがあつたなら、農民并に自餘の人民をして自ら其利益を代表し、權利の要求を提出せしめよ(立憲政治を行へこの意味)と云ふたうして最後に伯は皇帝に對して政府は土地を買占めて、比較的廉價に之を農民に譲り渡せよと、皇帝は此の手紙を一讀するや否や、直に筆を執りて有益にして且つ幾多の眞理が含まれて

居る意味を以て返事を送つたうである。

◎佛蘭西の愛國的教育 歐洲諸國にありて宗教以外に立ちて、倫理教育を施して居るは、獨り佛國のみである、ソコテ獨逸の或新聞が佛國は宗教によらずして、何事を標準として教へて居るかに付て、稍々嘲弄的態度を以て教科書の内容を點検して、こゝにいふ事を擧げて居る、乃ち前總理大臣デュビの教科書第十頁に

問、三色旗の通過するときは如何にすべきか。  
答、三色旗の通過するときは労働を停止し朝を脱して敬禮する等の事を記載して居る、又シャルボンの國民教育全書の中に佛國は世界中最も善真なる國である、佛人は他の人民よりも習性及感情に於て、遂に卓越して居るは獨り佛國人民であるといふてある、又セルドといふ人の教科書に

問、我々は獨逸人を愛することは出来る否や、  
答、佛國を害し、アルサス、ローレンを奪ひたるものに對して、我々は愛するさういふ考は、如何にしても思ひ浮ばないといひてある。

### 労働者改良の三策

レオ、トルストイ、

労働者の状態を緩かにし、彼等の間に同胞兄弟の實を行ふの方法三あり、曰く

- 一、人民をして汝が爲めに働かしむること勿れ、直接若くは間接に彼等の労働を要求する勿れ、特別の労働を要する如きの品物即凡ての贅澤品を要すること勿れ。
- 二、自分自身の爲めに自ら働け、猶爲し得べくむば他人の爲めに、而倒なる面白くなき仕事を爲せ。
- 三、天然の法則を研究して、労働を軽減すべき方法即ち、

### 雜 録

## ミルトンの隠れ家、パンの會堂

旭 村 生

昨三十四年五月再び英國に遊び、社會學を視察し、一日癩癩病者治療の爲めに設けられたる殖民地を見舞はんとて出づ、場所はチャルフォント、セント、ピーターとして倫敦を去る十八哩なりリックマンズオースと云へる所にて瀛車を下り、馬車を驅り田舎道を辿りて行く、此よりスローに至るの道條は、文學的趣味に富めること、倫敦近傍他に其比を見ざるなり、よく整頓したる牧場に、一面綠蕪を出で、恰も毛氈を敷きなせるが如き、英國特色の野趣を賞しつゝ行くうちに、風光明媚人を迷はしむるが如き小村落に達せり、古雅なる人家三々五々相連り、一帯の小丘草綠なる中に、白き櫻花は爛熳として咲き亂れたり、顧みれば『ミルトンス、ヘッド』と云ふ宿屋あり、驚きて案内記を細けば、チャルフォント、セント、チャイルドとして、ミルトンが隱家のある村にして、失樂園を書き終りて、復樂園を書き始めた所なりといふ、一讀懷古悽愴の情に堪へず、直ちに車を停めて其遺跡を

器械、蒸氣、電氣を發明することは前の第二策の結果及び適用にして、實に別に成りたつべき改良の方法にはあらず。されど人は實に要するものを發明して、不用のものを發明せず何んぞなれば人は自分自身の労働、少くとも自身経験したる労働を輕めむが爲めにのみ又發明をなすが故也。

已上の三策ありと雖現在人は獨り第三策を適用するのみならず、而かも之を用ふるや正しからず、何んとなれば第二策と離して用ゐれば也、且つ彼等は第一第二の策を用ゐることを好まざるのみならず此等の事を聞く事すらも望まざる也

獨り一の永久なる革命あり得べし、而して是道徳的の革命なり、人間内心の改造是なり

然らば如何にして此革命を創むべきや、何人も如何に此革命が人世上に起り来るかを知らず、されど明らかに自身に之を感じざるものはなし、猶此世界に於て各人は人世を變せん事を考ふるも、何人も自分自身を變更せん事を考ふるものな

人民は奴隸制度を廢し、奴隸を所有するの權利を止めたりされど不用にも彼等の「リチン」を新たにすることを改むるなく十個の部屋に住し、五種の食事に飽き、出づる必ず車を用ふ、而してすべて此等のものは奴隸なくして有り得べきものにあらざる也、是十分明瞭なる事なれど何人も之を洞察する能はざる也。

訪ふ、家は恰も日本家屋に似たる、低き質朴なる田舎作りにして、古風の烟突は道に沿ふて立ち、窓硝子は格子作にして瓦は赤くして古色あり、殊に壁は青々したる蔦を以て蔽はれ、趣味擲すべきものあり、其道に近き一室は、詩人の居住せし儘にして、彼の盲詩人は恐くば此室に坐して、第二の妻エリサベスをして、復樂園を書き取らしめしならむ、入口を中心として反對の側に一室あり、古き木造の燵爐あり、是當年の物なるべし、詩人の像及び遺筆等紀念の品は室内に配置せられて、一として其高風を追慕せしめざるはなし、予は少しく詩人が此處に居住せし來歴につきて物語る可し。

抑、此地方は、バッキンガム、シェヤーにして、敬虔なる信仰と、摯實なる思想を有する人民の住所なり、チルターンの丘の南、ミスカーン河の谷は、十五六世紀の頃、ローラード教徒が深き根據を据ゑたる所にして、幾多の殉教者が、血を瀝ぎ、炎に焚かれ、英國憲法史上忘るべからざる人物の輩出したる舞臺也、後の蘇蘭の宗教改革者、ジョン、ノックスも來りて説教せしことあり、又ジョン、ハンブデンの感化を受けて進歩せるピューリタンも行はれたり、十七世紀クエーカーの創立者、ジョージ、フックス此地方に來りて熱心なる歸向を得、多數の同朋集り來りて、クエーカー徒の根據地となるに至れり、而して此チャルフォントなる處に邸宅を有せる、アイサック、ヘニングトンは彼等の中心となり、詩人ミ

ルトンの書記をなせし、トーマス、エルウッド、及び米國費  
府の基礎を置きたる、ウヰルヤムベン皆此地方に住して、幾  
多の迫害と幽囚とを蒙り、其質朴真率なる一生を送りたる所  
なり。

エルウッドは初め倫敦に往きて、ミルトンに學びたりしが、  
後年倫敦に流行病猖獗を極めし時、ミルトンは之を避けむこ  
とを欲し、書をエルウッドに送りて、適當なる住家を周旋せ  
んことを求めたり、其需めに應じたるもの、即ち此チャフォ  
ント、セント、チャイルス村なるミルトンの隠れ家なり、盲  
詩人は妻子を携へて此に住居せり、一日エルウッドの訪ひた  
るとき、詩人は一原稿を出し、小閑の餘之を讀むべき事を  
命じたり、是即ち失樂園なり、エルウッド一讀咏嘆して措  
かず、ミルトンに謂ふて曰く、既に樂園失落は在り、樂園回  
復に就きては如何と、ミルトン聽きて沈黙をなさず、遂に  
再び筆を此小屋に取り、復樂園を草す、ミルトン倫敦に  
歸りたるの後稿成る、乃ちエルウッドに示して曰、是卿がチ  
ヤルフオント村に於ける注意の賜也と、予は偶然にも此の  
ミルトンの隠れ家を訪ふを得、轉當年を想像せずんばあ  
らず、米人屢此小屋を購ひて米國に移さんと欲する切也、され  
ど十五年前より之を保存する事となり、其廣なきに至れりと  
す。

予は車を驅りて行こと敷町、畫の如き村落は綠なる草と白

き花とを以て飾られたり、忽ちにして丘陵を下り、谷となり、  
前面眼界開きたり、左を顧みれば凹みたる平坦なる廣場あ  
り、恰も樹園の老るたるが如し、唯鬱々たる菩提樹は其一隅  
に茂り、古き煉瓦の小屋は、靜かに其間に立てり、密に茂れ  
る森の間より聞こゆる野鳩の聲は、益々寂寥の感を増さしむ、  
處々の生垣はプリムローズの花にて滿され、樹林も灌木も青  
々として、櫻の園は雪の如く遠く連れり、此の如き景色は涼  
車にて都より都へ急ぐ旅行者は迎も想像だも及ばざる所な  
り、此處はチヨルダンと稱して即ちクエーカー教徒の集會所  
なり、番人に案内されて、會堂に入れば、粗造質素なる腰掛  
が規則正しく配列されたるのみにして、他に一の裝飾だもな  
し、壁は白く洗はれ、窓は格子細工にして、室の一端は少し  
高く、フラットフォームとなれり、是れ實にウヰルヤム、ベ  
ンが常に其同朋を集會して、熱心質朴なる態度を以て黙禱を  
捧げし處なり、二階に二室あり、是婦人室に供せられたるも  
のにして、窓の戸を排せば、直ちに會堂に臨みたる高廊と變  
し得べき仕掛なり、會堂の後に馬廐ありて、大さ二十頭を  
容るべし、事あるに臨みて、窓戸を鎖して婦人を擁護し、馬  
に跨りて難を防ぎたる見るが如し、一面平坦なる廣場は、緑  
草を以て蔽はれ、其間に十二個の形ばかりの小墳墓を認むべ  
し、是れ、エルウッド、ウヰルヤムベン其妻子の靜かに眠れ  
るなり、平和を以て暗號として沈黙を以て主義とせるクエカ

徒に向ては洵に適切なる場所にして、世界廣しと雖何れの  
處か、より靜かなる者あらむや、彼は二度米國ペンシルバニア  
洲に航し、土地を開拓して、平和なる同教徒の世界を形作れ  
り、屢々種々の嫌疑を蒙り、殘酷なる拷問を受け、久しく禁錮  
の耻辱に遇へり、晩年癱瘓に罹りて、六年の久しき、其容貌猶  
同情親切の光を輝かしつゝ、此靜境に平和なる生涯を了せり  
といふ、米のフアラデルフヤは、即ペンンの基礎を置し所、從  
來クエーカー市の名ある所以なり、後年米國獨立の時、各州の  
代表者集りて、自由の爲めに誓ひたるは實に此費府にあらざ  
り、今や同市民は新らしき市廳を立て、世界第二の高塔を作  
り、上に安するにペンの彫刻像を以てせり、而して其中に新  
たに壁を作りて、市民舉て此ヨルダンの遺骸を移さむ事を  
請ふ、然れども此申込は拒絶されて、彼は英國民代表者の一  
人として、英國の土に休みつゝあるなり、たしかに英たるも  
の其精華の一として、以て誇るに足るべし、一日の郊外旅行、  
感慨頗る深かりき、今筆をとりて當時の記憶を寫す所なり。  
予英國の教界を視察し、彼か宗教改革已來、國立教會制を  
とり、千古儼然として變更せず、着々として之を經營しつゝ、  
あるを見て、其實際方に感服するもの也、而して予は之と同  
時に其已外の教徒の行爲に就きても亦大に意味の存するを認  
むるもの也、彼等は實に教會としては本國に成功せず、却て  
外國に遁るゝの止むを得ざるに至れり、ピネーリタンは米國

ポストンに、クエーカーはフアラデルフヤに、メンデス  
はバルチモアに旺盛を極むるにあらざや、されど彼等は國  
立教會の空氣をして純潔ならしめ、血液を清淨ならしむる  
防腐劑となれり、是彼等が眞摯なるに在り、敬虔なるに在り、  
實行的なるに在り、熱誠火の如く、堅實石の如きに在り、前  
記の兩遺跡、猶其一端を示すにあらざや、是吾人か以て戒  
となすべきの點也、前世紀に於ては此性質は宗教的社會事業  
の上にあはれ、教會の内外を問はず、信仰の猛火を以て、  
社會を根本的に改善するの運動となれり、セテラルブリスの  
救世軍、ミーム伯の會長たる教會軍、の如きは下層の社會に  
働き、チヨーチ、ウヰルヤムの首唱にかゝる青年會の如き、  
健全なる社會に向て、世界的に成功せしものとす、一言、英  
國宗教性質を紹介すること此の如し。

チユリツヒに留ること三日、一日リユツエレンに遊ぶ、瑞西山河の景緻は  
此に至りて極まらむ、チユリツヒより流車二時間程にして、又ユトリッ  
クなるアルプスの一峯の山頂に上る、此に瑞西の全景を觀望し得たり、昨朝  
チユリツヒを發し、急いで今朝當地に若す

四月廿七日 巴里にて 松本文三郎

チユリツヒに留ること三日、一日リユツエレンに遊ぶ、これよりシユラルツ溪流に  
沿ふてシユラルツアルカに向ひ、山水の清きに飽かんことを欲する所なり、先日  
兩君宛にて端書を認めながら、エーナの黒熊ホテルの机の上に置き忘れたり、出  
して呉れしや否や、訝し、

五月二十一日 フランケンアルヒにて 吉田靜致



# 基督教慈善事業の發達

池山 榮吉

第十九世紀は、基督教外國傳道が最も廣く行はれた時代たると同時に、また基督教慈善事業が、最も健全なる發展を遂げた時代である。今日歐米の基督教の行はれて居る地方では其の舊教たると新教たるを問はず、到る處、慈善的社會的事業が實によく行渡つて居つて、さまざまの目的、さまざまの形式、さまざまの方法に於て、恰も網の目を張つた様に、社會の隅から隅まで届いて居る、併しその此に至つたのは、一には宗教上、信仰覺醒の機運が到來したにも因るが、工業の進歩に伴ふ社會經濟上の變遷と、家族制の解弛に連れて、漸く極端なる個人制に赴く親族生活上の推移とが確に主な原因となつたので、慈善事業の繁昌は必しも賀すべきことでは無いが、社會上避くべからざる必要に應じて、吃々、救濟の策を講じつゝある現今基督教界の現象は、吾人佛教者たる者の刮目して觀るべきものである。

一々の事業の詳細は、追々誌上で紹介しやうと思ふが這回は基督教慈善事業が古來如何なる順序を経て今日の發達を來

視

察

古 代

(第一世紀乃至第七世紀)

したかといふとに付て述べるとしやう。

飢にたる者に食はしめ、渴したる者に飲ましめ、裸体の人に着せしめ、異郷の人を宿らしめ、病める者を看護り、囚はれたる者を見舞ひ、死したる者を葬むる、といふ所謂七善行の觀念は始より基督教徒を驅つて、大に慈善の事に従はしめた。されば使徒時代に於ては、信徒は互に相倚り相幫けて、兄弟姉妹の如く交はり、宛然一大家族を形成して、富者は貧者の爲め、舊て財を捐すとを吝まなかつたので、一種の共產制を實現した概があつたといふ位で、固より救濟のことは、なか／＼よく行届いて居つたものと見ゆる、併し其組織手續等に至つては猶發達の初歩にあつて、確かとした事業的の形は未だ完成されなかつたが、其後追々信徒の數が増し、教團の組織が出来上るに及んで、第一世紀の末頃から第四世紀の始に至る、凡二百年餘の間は、教團其物が慈善事業の機關となつて働くと、なつた、従て、慈善事業は總て教團の指揮監督するとなり、其下に『チアコン』といふ、貧民救助を主務とする若干の教師がゐる、教團を補けて直接其事に當てゐた、救助に要する金品は、信徒の喜捨、殊に聖餐式の際に集まる奉納物の中から支辨されたので、初は是等の物は總て神に屬し、貧民の爲に使用さるべきものとなつてゐて、後に、段々教團の收入及び費用が殖へてからは、收入の四分の一を以て

慈善費に充てるとなつて居つた、救助の條件及び手續はなかく嚴格で、當時はまだ何と云つても、信徒の數が餘り多くなかつたため、『チアコン』は能く貧民各個の状況を詳細に知ることが出来、實際、老病等の爲め自活する能力のない者は漏れなく之を保護したが、惰懶の結果困窮に陥つた者などは、決して救助を與へる様なとはしなかつた、救助は成可品物を以てし、且其量は極必要の限度に止め、また其仕方は、一々、被救助者の特別の事情に應ずるとを主眼とし、殊に、被救助者の、再び自から働いて、經濟上獨立のできる様にするとに注意した、で、場合に依ては、仕事を見付けて遣たり、道具を買てあてがつたりするともあつた、斯ういふ場合で、此時代に於ける慈善事業は、實際能く其目的を達するところまで、教團内に於ては不幸の結果欠亡に悩む者なく、又救助に遊食せんとする乞丐の徒を生ずるともなかつた、併し其事業の範圍は主として教團内に限られてゐて、僅小の場合を除き、他の教團若くは異教徒に及ばなかつた。

しかるに、基督教がコンスタンチン皇帝の御宇に公認されてからは、急に諸般の形勢が一變して、其結果慈善事業の方にも大に影響が及んで來た、從來の、少數で而も篤信の信徒から成立つてゐた教團は、一躍して信徒の數或は十萬を以て數ふる程の大教團となつたので、従前の如き綿密なる救助方法は、到底實行するがでなくなつた、諸種の特權、喜

捨、遺贈等に因て非常の富を集め得たる教會は、従前に比し、遙か多大の布施を願つたので、一々被救助者に就て詳細の事情を取調べるとをしなかつたので、眞の慈善の目的を達することが出来ず、却て色々の弊害を醸す傾向があつた、此の如く一方には舊來の教團救助の方法が依然繼續されて居つたが他方には更に、一定の建物内に窮民を收容して、こゝで救助するといふ方法が行はれ出した、かくなつた所以は一つは教團救助では到底當時の社會の窮乏に對して手が廻りかねたのと、二つには基督教の迫害時代が去つて、公認時代となつたので、公然とかゝる營造物を施設しても差支ないとなつたからで、第五世紀の後半頃から、教團救助の方が追々廢れて行くに従て、營造物救助の方が益々旺んになつて行つた、之を要するに、第四世紀の始からは、教團救助と營造物救助が並び行はれて居たが、孰れも其遣り方は甚だ雜駁で、當時既に『水の火を消すが如く、布施は罪障を滅す』といふとが一般の教となつた結果、只與へる一方に重きを置いて受ける者の如何を顧みなかつたため大に乞丐を勸奨する弊に陥つた、ヴレンチニアン第二世を始としてオドシウス、ユスチニアンの諸帝は、乞丐防遏の法を設けて、勞働能力ある者の乞丐を禁止しやうとしたが、孰れも永續の成效を見るとが出来なかつた。

中 古 (第七世紀乃至第十六世紀)

中古に至つては、夫の救團救助は全く其跡を絶て、専ら營  
造救助が行はれる様になつた。此の推移を最もよく現はして  
ゐるのはマトリケル (Matrikel) と云ふ言葉で、元は、救團  
の保護を受ける貧民の名簿のとであつたのが、今は、貧民を  
收容する營造物を意味するやうになつた  
當時の無数の營造物にはさまざまの種類があつたが就中最  
も廣く行はれたのは修道院附の『ホスピタル』で、これは今  
日の病院とは違つて、多くは病院、旅人宿泊所、貧民收容所  
の三部から成立してゐる、此外單に貧民の宿泊を目的とするも  
の若くは特に或種の病者の治療看護を目的とするもの等いろ  
／＼あつて其數は實に多岐にわたつてゐる、實に此時代に  
於ける慈善事業の發達は驚くべきもので、一方には慈善を目  
的とする營造物がズン／＼増加すると同時に、他方にはまた、  
専ら若しくは主として慈善を目的とする講社(武士オルデン、  
ヨハンオルデン、獨逸オルデン、聖靈オルデン等)が續々と  
起つて諸種の營造物の内外に於て献身的に働く必要の人員を供給  
した。加之中世の後半頃からは、所々に市立の『ホスピタ  
ル』が出来、それから貴族、地主、商人、職人等の諸種の  
組合が各其内部に於て救貧、病者保護等を行ふ様になつ  
た、併し乍ら總て是等の慈善機關は全く個々分立の姿で其間  
に何等の連絡もなかつたので結局受救者の必要に應じて、布

施の金品を適當に分配するといふ救助に一番肝腎の原則が全  
然度外視されるとなつた。即、修道院、組合、『ホスピタ  
ル』其他の營造物は、毫も他の所爲に頼着なく各々勝手に其事  
業を遂行したものだから、自然、最も多く救助の恩澤に浴す  
る者は最も乞巧の術に長じた者で、正直な眞の貧者は却て之  
に與らないといふ奇態を演出するに至つた、のみならず、不  
規律なる救貧は當時に於ける諸他の宗教上、社會上、經濟上  
の理由と相待て一部の人民をして正義に就くを厭はしめ滔々  
相率ゐて乞巧の群に投ずるの風を馴致して、後には乞巧は群  
をなして町を練り歩くといふ有様を現するに至らした、そ  
こで第十四世紀の後半頃から、英獨佛蘭等の諸國は、相接い  
で乞巧禁遏法を頒布したが、一向果かん／＼しい効果の見えな  
かつたのみならず、一部の者には、公然乞巧の權利を認め  
やうなどになつてしまつて、益々彼等の勢焰を高めた氣味が  
あつた。

固より中古の教會と雖も、仕事を厭て必要な乞食する  
は、一の罪惡であると教へたのであるが、併し世間を巡りて  
清淨の行を爲すは世間通常の職業を營むに優り、所有を抛  
棄するは之を管理するに勝り、布施は、之を何人に對して爲  
すを厭はず、一の善行であるとしたものだから、一面から見れ  
ば、布施を受ける者は、布施を爲す者の爲め、其善行を行ふ  
の機會を與へたもので、即乞巧も亦一の慈善行爲たるかの如

き觀あらしめ、他方に於ては、大に布施を奨励したもので、  
之を爲すの目的は、主として他人の困窮を救ふといふ點に存  
せしめずして、寧ろ是に由て神の恵を買はんといふに過ぎざ  
らしめた、斯る状態の下に在りて、夫の乞巧禁遏法の功を奏し  
なかつたのは、固より怪しむに足らないとて、どうしてもこ  
の職業所有、布施に就ての觀念が改らない以上は、秩序あ  
る組織の下に正當の救助を行ひ、慈善事業本来の目的を遂行  
するとは到底不可能のとであつたのである

近 世 (第十六世紀乃至第十九世紀)

信仰に因て救はれるといふ宗教改革に於て發揮された考  
は、自然慈善事業の上に大影響を及ぼした、布施は救はれん  
が爲めに之を爲すのではなく、神の恵に對する感謝の念を表  
彰するものとなつた、遁世の風は消えて、所有を抛棄する  
は別段賞むべき行ひではなく、道德上の價値は、却て財産を  
活用して『近き者』を助けるといふ點に存するとなり、乞巧  
は不正の行爲たるを免かれずして、諸他の行と同じく、固よ  
り何等の功德をも生ずべきものでなく、業務に精勵するは當  
然各人の神聖なる義務に屬するものとなつた、健全なる慈善事  
業の發達すべき地盤は、斯の如くにして立派に出来上つたが、

同時に、在來の支離滅裂なる救貧事業の統一整頓を目的とす  
る、一種の救恤法(共同金庫法と稱する)が制定された、其  
の方法及び手續も、總て夫の古代に於ける救團救助に似て居  
つた、併し古代の救團救助は、全く教會の獨力でやつてゐた  
のに引換へ、新法に依る救助も、當時の政教關係の結果、純  
教會的でなく、何れかといへば、寧ろ國家的のものであつた  
點に於て、兩者の間に大なる差異が存してゐた、該法の規定  
は、大体に於て、現今一般に救助に關し認められてゐる原則  
と一致し、法文の上に於ては殆んど間然する所がなかつた  
が、種々の理由、殊に『オルデン』に代るべき適當なる人員  
の缺乏に因て、實行上に差支を生じ、豫斯の半分をも達する  
とが出来なかつた、是を以て既に第十六世紀の末になつては  
乞巧は再び到る處に繁殖し、『共同金庫』は遂に其本来の目的  
たる、秩序ある救恤事業の中樞となるといふことを事實に現は  
すとが出来ずに了つた

其の實行の一段に至つては、必しも思想の進歩に伴ふとい  
ふ工合に行かなかつた  
ルーテル派の改革に行はれた地方では、教會制度の完成と

宗教改革に因て惹起された救助に關する考は、ルーテル教  
會に於けるよりも、カルヴィン教會に於て比較的完全に實行  
された、元來ルーテル派の方では、貧民救助の、基督教的  
生活に於て缺くへからざる行動たることは認めても、何人が  
其局に當るかは便宜の問題にして、寧ろ國家の經營に一任  
する方に傾いて居つた、カルヴィンは之に反して、貧民救  
助を以て教會直接の任務とし、教會は國家の如何に關せず、

獨立して其局に當るべきものを解し、教憲を定むるに際しても教職を分て説教職、救護職の二つとした、カルヴィン教會は國家と一致した地方(例へばゲンフ)では、結局ルーテル教會と同様に、半、教會的、半、國家的救助が行はれたが、却て其の國家に關係せず若くは反對して發達した地方では、右の原則が充分に實行されて其組織及び效力に於て古代のと酷似せる純然たる教團救助が再現された

宗教改革の效力を及ぼさなかつた地方、即舊教諸國では、舊に依て營造救助が慈善事業の中心となつて居つて、此方向に於て益々發達して行つた。殊にヨハン、ゴット、ヴンサン、ポールの創設に係る『慈愛兄弟』『慈愛姉妹』の兩オルデンは、病院其他一般の慈善事業に向て、修養ある人員を澤山に供給した、國家の方では、乞丐防止若くは貧民救助に關し、種々諸令を發布したが、動もすれば教會の反抗を招く虞があつたので、孰れも主義の貫徹しない半熱的のものばかりで新局面を開いたものはなかつた

第十七世紀の後半から、第十八世紀に於て行はれた、實信主義と、合理主義とは、一は信仰實現の立場より、一は一般人道の立場より、當時漸く沈淪の境に向ひたる、一般慈善事業の策振を促した、從來は、國家若くは教會、又は國家若くは教會と密接の關係を有する營造が、専ら救助の事に當つてゐたのが、今や是等の者の外、更に、自由の組合が勃興して

來て廣く慈善的、教育的、社會的方面に向て働くこととなつた、一面に於て舊來の救助事業が刷新されると同時に、他の一方に於ては、ハレリ孤兒院に於ける少年及び青年の教育、ハムブルヒ愛國協會に依る貧民救助、ベスタロッツチの感化事業、ホワードの囚徒保護、ツィゲマンの工業學校、ピーネルの頓狂院、ハイニツチの盲啞院、シェフラーの幼稚園等は、他の模範となり先例となり、諸方に同種の事業を喚起して、第十九世紀に於ける所謂向內傳道の魁を爲した、其他一般の救貧事業に大關係のある、諸種の保險事業貯蓄金庫等の始まつたのも、矢張此時代のことであつた

最近世 (第十九世紀)

第十九世紀は、過去に於ける慈善事業發展に伴ふ、總ての利益の綜合を試みた時代である。古代初期及び宗教改革時代に於ける救團救助、古代後期及び中古に於ける營造救助、實信主義及び合理主義時代に於ける組合救助、是等の形式は、昔現時の慈善事業に於て見ることが出来る。又其の事業の主体から見ても、古來各時代に於て相前後して現はれた、國家(地方團體)教會(救團)營造(財團)自由組合(社團)及び個人と、互に相並んで、獨立若くは共同して、それ／＼局に當て居る、而して其事業は、皆第十九世紀に於て非常に進歩したが、就中最も發達の著しいのは、國家及び自由組合の經營に係る事業で、今日では國家は諸種の法令殊に勞働者保護、

勞働者保險等の立法及び行政に依り一般に社會下層の利益を保護するの外、概ね『貧民救助』を以て自家直接の經營に歸せしめ、教會は多少の參與を爲すに過ぎないこととなつた、從て此方面の事業は國家直接の行動で、所謂基督教慈善事業の範圍を脱することとなつた、自由組合の中には、

宗教を事業の基礎とするものと、人道の立場にあるものと、の別があるが、兩者の間には幾多の段階があつて、何れか俄かに判斷を下しにくいものも尠くない、第十九世紀の新教々界に於ける慈善事業は、主としてこの宗教を基礎とする自由の組合に依て遂行されたので、元來新教の方は慈善事業に付ては、兎角舊教の方に押される氣味があつたところではない、實際遙に後れてゐた觀があつたのが、急に長足の進歩をして遜色なきに至つたのは、實にこの自由組合の運動の功績である、獨逸ではこの運動を稱して外國傳道に對して、『向內傳道』といつて居る、即外國傳道の眞のハイデン(異教徒)に對する如く、基督教會内部のハイデン、換言れば信仰なきものに對して行ふ傳道といふ意味である、向內傳道の父と稱せられるウィッヘルンは、『向內傳道』とは、基督に對する信仰の力を以て、罪よりして直接又は間接に生ずる種々の内部及び外部の腐敗墮落の勢力範圍に沈淪せる基督教界の人々、而も其人々には通常(救團)の教師の手の届かぬ人々を、內的及び外的に更新せんとする、總ての愛の仕事である」と解し

向內傳道の定義は必しも一致して居ないが、歴史の上から觀察すれば、向內傳道は第十九世紀に於ける宗教的社會改革運動であつて、信仰の地盤の上に立て、其信仰を慈善事業の上に現はし、社會に宗教を扶植し、依て以て社會の根本的改善を企てたものである、實に第十九世紀に於ける向內傳道は其廣延に於て、其種類に於て、其組織、方法、機關等に於て、大々的發達を遂げ、第十九世紀の教會史上最も光輝ある材料を提供したものである、而して此運動は、獨り獨逸のみならず、他の新教諸國、殊に英米に於て最も旺んに行はれ、且其發展は既に今日を以て頂點に達したといふではなく、尙ほ着々其歩武を進めつゝあるのである、今左に、方今獨逸に行はる、最も普通の向內傳道事業の種類及び統計を掲げて、以て、歐米に於ける一般慈善事業の概況を推知するの便に供しやう但し慈善事業の種類は此に盡さるではなく且、この向內傳道事業の外、國家及び地方團體の經營になり、貧民救助其他一般の慈善的公共事業、加特力教會の慈善事業、救團直接の救助事業が並び行はれてゐるとを忘れてはならない、終に臨んで猶一言すべきは、近時、是等諸方面の事業が、追々相互の間に連絡を通じ、以て一層事業の有效を確保せんとする趨向のあるとで、これまた大に注目すべき現象である、

甲、子供に對するもの

- 一、幼兒預所 一〇二、二、幼稚園 二七〇〇、

- 三、少年授業所 三三二、
- 四、日曜學校 一六五四
- 五、少年感化院 三二〇、
- 六、孤兒院 二五一、
- 七、養育協會 一四〇

乙、青年に對するもの

- 一、青年會 一九九三、
- 二、徒弟會 一〇八、
- 三、女子青年會 三〇四九、
- 四、家計學校 一六三、
- 五、下婢養成所 三八、
- 六、青年感化院 七八

丙、旅行中の人若くは故郷を離れたる人に對するもの

- 一、旅宿 四六五、
- 二、勞働者植民地 二四、
- 三、下婢宿泊及び寄宿所 八九、
- 四、工女寄宿所 一八、
- 五、停車場傳道 五五ケ所、
- 六、海員傳道 四二ケ所(内國及び外國に於て)
- 七、給仕傳道 八二ケ所、
- 八、兵士傳道 四九ケ所、
- 九、グスターフ、アドルフ協會(内外に於ける舊教地方の新教徒を保護するもの)四五ケ所

丁、特に宗教扶植を目的とするもの

- 一、市内傳道組合 七一、
- 二、新教勞働者組合 四八、
- 三、聖書出版會社 九、
- 四、雜誌類 五〇、
- 五、日曜新聞の類 一九五、

戊、病者、老者、廢疾者に對するもの

- 一、病院 三五九、
- 二、養老院 三七五、
- 三、聖

- 四、盲院 二六、
- 五、癲狂院 九、
- 六、白痴院 三三、
- 七、癲癩院 九、
- 八、不具者收容所 一〇、
- 九、保養所 六八、
- 十、小兒養生所 五九、
- 十一、小兒夏期植民 一四八、

己、社會特種の欠狀に對するもの

- 一、風俗矯正會及び白十字會 二二四、
- 二、淫賣婦救濟所 五〇、
- 三、節酒會及び青十字會 三〇〇、
- 四、大酒治療所 一五、
- 五、冤囚保護會 四二一、

信 界

呻吟語

眞岡 湛海

故郷に歸る頃に、島田藩根翁は、勸君莫歸郷、歸郷道不行、並合老婆子、説汝舊時名と再三言ふて下されたが、實に面白る意味のある言である。思ひ出すのである、正法眼藏の行持の卷にも此事は出て居るが、讀むたびごとく、何となく感に堪へない様である、源信僧都が故郷の母に逢いたくてたまらなかつたのに其老母は頑として、已れが臨終の時まで歸るとを許さなかつたといふのも、今さらの様に思ふて益々深く感じて居るのである、今は病中に苦悶して居るか

らまともつた考へは此次までのばして頂きたい、鐵牛君から借りてきた呂新吾の呻吟語が座右にあつたから取敢へず、其名を借りて二三行書いて見ましたから讀んで下さい、此次には「アーヒンク」か「ウチーヅウチー」の様に田園の生活の樂しむべきとを書き送りましょう、

曾子は日に三たび吾身を省み、人のために謀て忠ならざるか、朋友と交て信ならざるか、習はざるを傳ふるかと三省したといふのであるが、私の今の境遇は、此中でも最後の、習はざるを傳へざるや否やと省みる時に、我責任の重いとを感じて苦しむばかりである、是を都會に居る人にくらべて見ると、都會の學者方はエマソンンの言によると所謂ブレイッアリストの仲間ばかりで、不思議にも、こう云ふ人を段々嫌思するの情があつてくるのである、善く言へば誇大を避けて眞面目になり、悪く言へば小心に過ぎて卑屈に流るゝのである、都會では廣やかなところで大きなものを見出すとが出来る、田舎ではささやかなるところにて小さきものを拾ふばかりである

近頃も二三の人が何か分りやすい佛教の書籍を講じてくれといふから、支那で譯經の嚆矢と云はれた四十二章經を講じますと、ろの中で「心は功曹の如し、功曹若し止めば從者都て息」といふ章があつて功曹といふ文字が分らぬ、そこで道需の佛祖三經指南を開いて見ると「北堂書鈔曰功曹糾司

外内、扶直繩違」とあつたので漸く功曹の意義を解し、それから、宋の眞宗皇帝の註四十二章經を繕きて「功曹、王者之稱」とあるのを見て一層明白に主従の關係に譬へたのが分り、それから又藕益大師の四十二章經解を開きて、益々其妙味を解するとが出來たのである、又其終りの方に「大千界を視ると一詞子の如し」とあるのを見て、是は詞黎勒と云ふ草木の實を一詞子と云ふたのであると云ふとを知りて、かゝる、ささやかな小さな處に大きな賜でもあるが如くに感じて非常に愉快に思ひ、又今迄の讀み方の相違であつたと、佛教に對する知識の淺薄なるを自ら耻しく思ふ様になつた、序に、かつて讀んだのである、「サミュエル、ヒールの「カテナ」を開いて四十二章經の英譯を對照して見ると、實に噴飯に堪へない様な多くの誤譯を發見しまして及ばずながら訂正して置きましたから一閱を願ひたい、

淨土宗の行誡上人は、常に、凡ての事、隋唐以上のものは宜しく宋以下は下れり、宋以下は學問も書も共に下り就中、佛法尤も下れり、宋以下のものは、習はぬと極めよ、其内智旭、雲棲などの書は宜きも、宋の高僧傳は誤り多し、日本の佛書も四百年以後のものに凡て疎漏にして、あち多く弘法、傳教、道元、榮西などの書は宜しと思へといはれたか、至極同感で近頃の書物は水くさくさく讀むに足るものはない、博士の著述なども怪しいものが多い、雜誌や新聞は尙更のとてあ

る、政教時報なども讀まぬ方が宜しい。明末の雲棲大師の竹窓隨筆、二筆、三筆共に味ふべく、文章もなかく面白し、前に申した四十二章經に付ても、藏本と守遂の解本とを比較して、藏外にも別に見るべきものあると言ふて居る、しかし原の白隠などは餘程嫌であつたと見て於仁安佐美のなかに雲棲の珠宏といふ者あり四十にして出家、少しく文字を解す、小智に誇り小見を恃みて、真正の宗師に參せず、見性眼暗く、參玄力乏し、進むに寂滅の樂なく、退くに生死の恐れあり、此に於て名は禪門に在りて内には専ら稱名念佛して淨刹の往生を願ふと書て居る、隻手の音聲を聞けと喝破したる彼にとりては、雲棲などもゴッとして居る様に思はれたであらう、此が所謂識見といふべきもので甚だ面白い、しかし彼が三寸の舌頭に驚き倒るゝ様などでは進も駄目である、一代藏經を開く上に於ても人々に依て多少其讀經眼が違つて居るのである、親鸞上人は三部經の外に出でず、日蓮上人は法華經の外に出でず、持尾の明慧上人は首楞嚴經を披きて一代聖教の眼目なりとて常に講じて居られた、森川町で普根翁の家をたづねて、應佛籍に關する話を聞たうち、老翁が梵網經の疏を取り出して開卷第一に菩薩戒とは運善の初章、卻惡の前陣なりとあるは、何んと云らぬではないか、吾人に取つては五戒や十戒を守るといふとも云らぬの様に思ふが、勇猛精進の人に取つては僅

に善に進み、惡を遠ざくる入門に過ぎないといふのじやから少しばかりの戒行や學問に鼻を高くしてはならぬといはれたらなど思ひ出して、益々讀經眼を高くして我身を反省する様にせねばならぬと思ふた、善導大師の所謂數讀數尋開發智慧であるから、只松風に睡りを覺し、朗月を友として讀み來り讀み去り、究め來り究め去つたならば、必ず得る所あるに違ない、不思議なもので書は讀むに従つて味をおぼね、又讀む時に依て感が違ふのである、數年前に平田篤胤の決定笑語を讀んだが其時には彼が智者大師のとを愚者大師じやと嘲つた様なところが非常に腹に立つたが、智といふも愚といふも眞に路傍の評判位で、まるで小供の争ひの様だと思ふたら、今は只笑ふて居るばかりである、それのみならず虚心にして讀み來る時は此等の書物といへども尙面白く感ずるところがあるのである、まして元んや行化五十年横説堅説をきき玉ひし一代の聖典は深く熟讀玩味して蘭毘尼園の芳躑を慕ひ、單波羅樹下の清風に浴せねばならぬのである、吾丈禪師は一日作さざれば一日食はなかつたといふ位であるから、只忙々地にくらして、聖教に眼をさらさるゝは佛弟子たるもの、耻づべきとではなからうか、私は新佛はきらいで古佛がすきむや、佛教は唯佛與佛、古佛照心の味を悟らねばならぬ、佛來佛現、祖來祖現、古來古現、今來今現、天來天現、人來人現、十萬八千、皆是れ我修養の境である、物は去來し境は生滅す

れども靈知は常にありて不變なり」といへる道元禪師の言はにかに味ふべき語ではないか、此昭昭靈靈たるものによりて我は動かされ、我は生き、我は信するのであつて、品性といふものが自然に出來上つてくるのである實に品性は勢力である、路易十四世が、佛國の大を以てして小なる和蘭を征服するとの出來なかつたのは何故であらう、宰相コルベールの答へが面白いではないか、「一國の大小は國の大小に由るものにあらずして、其國民の品性如何にあり」といふたさうである、かゝる金城鐵壁たる品性の修養を忘れて居る國民は大に注意せねばならぬではないか、修養ある市民、教育あり文化あり品格ある國民はいかにして造らるゝでありませうか、人と人と疑い、友と友と猜み、親と子と争ひ、師と弟と快からずと思ふのは、畢竟相信するの關門が破れたからではないか、信仰の門一たび開けば、日出で、夜のあくる様なもので、疑も夢も迷も共に消え去るのである。

木の葉靜かならんとすれども、しかも風止まず、五月雨は降りつゞけて窓の音も何となく、ざわ／＼して居る、昨夜、龍舒の淨土文を讀んで、漸く心靜かに念佛して眠ることが出來たのである、其言に『若し寛大を學ぶときは則禪臨の時に於て之を習ひ、若し溫和を學ぶときは則忿怒の時に於て之を習ひ、若し恭敬を學ぶときは則傲慢の時に於て之を習ひ、若し良善を學ぶときは則狼戾の時に於て之を習ひ、若し辭讓を

學ぶときは則忿争の時に於て之を習ひ、若し勤敏を學ぶときは則懈怠の時に於て之を習ふ』とあつた、近角君が「讀經餘瀝」を書き始めたから、私も只此小感を書き送ることとし、病中の呻吟語であるから筆も思ふやうにまわらぬ。

教界彙報

- 本派新法主 歐洲巡遊中の西本願寺新法主大谷光瑞師は來る十月下旬歸朝せらるゝ由、此程同本山に申來れり、
- 盲人の保護 西本願寺にては板垣伯を顧問として、盲人保護事業を計畫せしが、同事業は第一期には盲人を收容し、第二期には按摩業を傳習せしめ、第三期には按摩業保護を爲すこととし、築地別院を本部に宛てたる由。
- 基督教取締 教會堂或は講義所の門前にて、婦女子を利用して案内書を配し、強て入會聽聞等を勧誘するものありて、風紀を紊るゝこと懸からざるを以て、其筋にてはそれ／＼制裁を加ふる云ふ。
- 携帶兒保育 同會は板垣伯主宰せる婦人同情會の一部の事業として、女因の携帶若くは因中に分娩したる幼兒を、母の滿期放免まで保育する積りなり云ふ。
- 佐賀中學生 前號雜道せし佐賀佛教中學生の退校事件に二三首謀者を討し他は悉く復校を許すこととし一段落を告げたり云ふ。
- 暹羅皇太子 同派皇太子には來る十月頃來朝せらるゝ趣、京都なる大日本菩提會事務所に向け領事より通知し來れり云ふ。
- 佛教質問會 女子大學并に女子高等師範學校の有志生徒數十名は、過月より毎月第一、第三の兩日曠島地師の自述社に會して宗教上に関する疑義を質問する會を組織せり。
- 各宗聯合會 京都各宗聯合會議は、例年五月開會する筈なれど、本年は都合により今月上旬開會すべし云ふ。
- 大派本願寺 同派にては鴻池銀行より一百萬圓をかり入れ、負債を整理せんとして目下交渉中なり云ふ。

# チンツェンドルフ伯 (中)

待 山 生

かくてチンツェンドルフは年來の抱負を一の團体の形に現はして、やうく希望の幾分をみたすと出来る様になつたが、さて之をうまく引纏めて彼の仕事の鞏固なる根柢とする迄にはまだ、非常の辛苦經營をしなければならなかつた、抑も夫のヘルンフートの住民は謂はれ烏合の衆で、種々な分子は各其素性風俗思想を異にしてあるものだから、之が融和を計るのは固より容易の業でない、人が殖れば殖ゆる程段々とうちはわれがして名々勝手などを言ひ張て争の絶ゆるとがなく、牧師ローテの如きもほとほとあまして匙を投げかゝつたチンツェンドルフは大に之を憂慮して遂に千七百二十七年の春官職を辭し、専心教團のことに身を委ねるとした、彼は非常の熱誠と忍耐を以て一人の處へ訪ねて行つて、或は教へ、或は諫め、極めて沈痛なる教誨を施し、且基督の信仰を基として一の教團憲法を制くり遂う、彼等をして古ペーメンの兄弟團の名に因める「新兄弟教團」なる組織の下に一致せしめた、是は同し年の夏のとて全くチンツェンドルフ

の燃ゆるが如き信仰と熱心と非凡の才力の致すところであつた、ヨハンフスがコンスタンチで囚はれて獄に居たとき、或夜の夢に彼が教堂の壁に基督の肖像をかけたら忽ち一人の見しらぬ男がやつて来てすつかりそれを消してしまつたところが暫して今度は上手な畫工が出て来て美事に書きあげたといふ話がある、事件の上から見れば其上手な畫師とは即ルイテル、カルジインの徒であらうがもし系統からいへばチンツェンドルフこそ其人であつたと見て差支ない、元來チンツェンドルフ自身は深くルイテル教會に歸依して居たものであるが彼の周圍に集まつた教團を該教會の教團及び組織の内に入れ込むといふとは、出来るまでもなかつたし又彼の希望するところでもなかつた、彼の終局の理想は普く全世界に亘て其の子をあつめるといふにあつたのであつた、是を以て彼の組織した教團は「ルイテル教會の根本義」たる、基督の死に因る救済といふのみを中心として、其他に別に一定の教理を立て、之を以て團結の連鎖とするといふとくたゝ愛といふ感情と喚起してそれを行為に現はすといふとを以て主眼とした、従て其教團は教の團體ではなく、單に愛の團體たるに過ぎなかつたしかるに、只愛といふ感情を以ては永く團體の固めとなつたが出來ない、どころから、彼は遂に組織に因て之が統一を計たのである、さて其組織は形の上にて於て古ペーメンの兄弟團に似てゐるが、其實は大に趣を

異にしたものであつた、ペーメンの方ではまだ加特方的臭味を脱せず、教團を主とし教團を従として定めてあつたが、之に反してヘルンフートの憲法は教團を主として規定し教團はあるとも只一の尊稱にすぎないで、教團統率の權は長老會の手中に存し、而して其長老會は重に俗人から成立てゐた、ヘルンフートの教團が、斯く外觀上ペーメン兄弟團を模擬し名さへも新兄弟教團と名けたのは一つは其はじめペーメンより移住したものゝ多かつたにもよるが、一つは宗教改革前より存在せる教團の承繼といふことに重きを置いたのである、尙夫の教團の中には直接組織に關する規定の外種々なる事項例へば「團員は凡ての教會に於ける凡ての神の子と兄弟の愛を以て交はり他の教團を誹らす而も己の信仰を守るべし」「罪より免かれんが爲めに神の前に自力を用ゆることなく、而も行を淨くするを努むべし」「世間の人と交ては深く心をゆるすことなく而も正直と義理とを旨とし粗き舉動あるへからず、または是等の人に對し時機をもちからず、猥りに教を説くべからず」等のことが定められた

新兄弟教團の成立するや否や、教團は内外に對して驚くべき活動をはじめた、内部に在ては人々皆全く從來の行掛を打忘れて、互に呼ぶに兄弟姉妹を以てし、友情の篤き信仰の旺んなる、原始の基督教團を除いては他に其比を見ない有様を呈した、總ての團員は朝夕相集て禮拜を行ふの外、更に幾人

宛かに分れて日々己の心の經驗と話合ふ小さい組が幾つとなく出來た、其上にまた二十四時を各團員に割宛て、かはるゝ教堂に參詣して、晝夜とも感謝と祈禱の聲の絶えないやうな仕組が出來た、それから住民の種別に從て小供は小供、若衆は若衆といふ工合に、少年、青年、青年女子、既婚者、寡婦、寡と皆それゝの講が出來て互に注意して行を淨くし誘惑に陥らないとを計り、講の頭には一人の世話人が居て牧師長老の補助として講内の風紀を取締り、教誨を施した、而してある家族に屬してゐないものは兄弟、姉妹、寡婦と別々に設けてある屋舎に入れるとにして且婦人は日常殊に教儀の執行されるとも十八歳迄の處女は赤、それ以上の未婚の婦は桃色、既婚の婦は青、寡婦は白のしるしを頭につけて、一見して其身分のわかるやうになつてゐた、教團は宗教的社會的關係に就て、かゝる著しい發展を爲しその珍らしいとは右の外一二にして止まらないが尙一とつ注目すべきところがある、それは兄弟教團は宗教團體たると同時にまた一の經濟的團體であるので、土地の大部分は團員の共有に屬しまた團員共同して諸種の商業を營みこれより生ずる収益は各團員の需要に應じて之を頒ち、團員はそれゝ仕事を分擔して取て怠る者もなく慥も使徒行傳第四章に記せる如く、信者はみな心を一にして凡ての物を共にもてりといふ有様を實現して、教團は即一種の共產的社會を形作てゐた

「彼等をして皆一とつならしめん」との誓願はチンツェンドル  
 フを驅てヘルンフットを中心として、一方に歐米に於ける基  
 督教徒の間に、他の一方には東亞西半球に於ける異教徒の間  
 に着々布教傳道を試ましめた、團員は二人つゝ一組になつて  
 四方に派遣された、嘗て兄弟四人して計たとは今や多くの兄  
 弟に依て實行さるゝとなつた、彼等は獨乙國內は勿論和蘭  
 英蘭愛蘭丁抹から那威露西亞の方迄も入り込んだ、信仰に  
 於て企てんとは實に彼等の覺悟であつた、チンツェンドルフ  
 自身も起てバルレナルヒ、ブーゲンゲン等を廻り殊にエー  
 ナに於て太く大學生の心を動かした、後年チンツェンドルフ  
 の承繼者となつたスパンゲンベルヒは即當時學生中の一人て  
 あつた、兄弟教團が愈々異教徒傳道に着手したのは千七百三  
 十二年で、チンツェンドルフが千七百三十一年コーペンハー  
 ゲンで丁抹國王クリスチャン第四世の戴冠式に臨んで西印度  
 人アントンといふものを見たのが其動機となつたのである、  
 このアントンは西印度のセント、トーマスに生れ、元奴隷で  
 あつたのが丁抹に連れて來られてロールウイ伯の處で奉公  
 すると、なり基督教徒になつたものであるチンツェンドルフ  
 は既にハレーにゐたときフランクの弟子で、東印度トランケ  
 バールの方へ傳道に行つてゐた、チーゲンバルクといふ人に遇  
 つていろ／＼話を聞たともあつたが、今眼のあたりアントンか  
 ら奴隷黒人の慘狀を聞て異教徒傳道の日も緩ふすべからざ

社會小觀

▲從來暹羅國と我國と外交上格別の事もなく打過き來りしを以て、同國政府に  
 て左まで我國を顧みざる有様なりしが、現外相小村氏は熱心に南方經營に力を  
 盡したる上日英同盟締結するに至りたるを以て、暹羅政府も俄に態度を一變し我  
 國に傾斜する傾を生じ來りたりといふ、兩國愈々親交するに至らば共に利益する  
 所甚大なるべし。  
 ▲府下女學生の風儀近來著しく墮落し來り、中には淫をひさくものさへありま  
 いふ、これ女子教育者の罪に座すべきか、抑々社會一般の墮落其罪點に達したる  
 兆候と見做すべきか、何にせよ悲むべき現象なり。  
 ▲警視廳にては最近に悪徳新聞記者を懲らし、今又悪徳辯護士を拘引して、大に  
 社會風紀の嚴肅を保全といふ、吾人は其取締の公平にして且つ嚴重ならむことを  
 望む。  
 ▲妖僧彼熊嶽なるもの祈禱の傍、米相場に手を出し、六百圓の損毛を來したる  
 より祈禱も亂麻となり、効能も果にあらはれず、祈禱を請ふもの次第に減しゆき  
 この頃は休業の札をかけ背息をつき居る由、自業自得さやいはん  
 ▲田中正造翁は會て法廷に於て欠伸したるを以て、侮辱事件に問はれ此頃入獄  
 中なる由なるが、錮鎖たる元氣例に變らねど、腦病の爲め朝より晩まで睡覺に假  
 はるゝには閉口し居るとして、訪問者に語りたる由、正義を以て目されたる此翁に  
 して鐵窓の下に呻吟するに至りたるこそ悲しけれ。  
 ▲郵便集配人にして廿五年以上勤続したるもの十人ありと云ふ、彼等は實に勤  
 勉なる國民といふべし、今回祝典を擧げたるに付、特に慰勞として通信大臣より  
 金十五圓を給與せられたりといふ。  
 ▲一賊あり日鐵停車場に待受けて、今しも着車せる荷物の大箱を盗出して持出し  
 たる處を密行巡査に見咎められ、引致せられて取調を受けしに、包の中には貴重  
 なる衣類反物と思ひきや、地方に發送する東京諸新聞の一括ならむとは、盗人も  
 役人もしばしは噁然たりきと、此時の賊の心中如何なりしや。  
 ▲近時總選舉の取締の嚴重なる爲め、小人数の宴會でも警官出張の上飲食  
 費を一々當分に支拂せしむるゆへ、飲食店には貸し倒れなき爲め非常に喜び居れ  
 りといふ、選挙干渉も意外の處に効果を及ぼすものかな。

るを悟り、睡郷の後大に其必要を説き立てた、そこで獨身の  
 兄弟は奮て其事に當らんと誓ひ抽籤に依て先つドーパーとニ  
 ーチユマンといふ二人が行くことになり、僅に路銀十兩宛を以  
 て千七百三十二年八月廿一日ヘルンフットを發して十二月十  
 三日にセント、トーマス島に着いた其後多くの兄弟は二人の  
 跡を追て來たが、習れない氣候のため一年に十人も亡くなつ  
 たともあつたそうである之を手はじめとして翌三十三年には  
 グリーンランドのエスキモー人それから北亞米利加印度人と  
 いふ工合に、南北亞米利加、亞弗利加、東印度等の方へ續々兄  
 弟が傳道に出かけるやうになつた、夫のジョンウエスレーが  
 千七百三十五年太西洋を渡たとき、二三のヘルンフットの兄  
 弟と一所になつたところが、途中暴風雨に出逢て船が難波し  
 さうになつたのに獨り彼等兄弟の平然たりしを見て大に感心  
 し千七百三十八年英國へ歸てから直にロンドンなる兄弟教團  
 を訪ねて、屢々教監ベールに面し遂に三月二十四日の夜ル  
 ーテルの羅馬書序説を讀むのを聞て豁然として大悟徹底した  
 といふ實話がある、夫の兄弟は即傳道の爲め初めて亞米利加  
 の方へ派遣された人々であつた。

日曜講話  
 毎日曜午前九時より本郷森  
 川町一番地中通二四一號に  
 ひらく

社會廣告

本誌今回聊か改良を加へ來候に付、定價を改正すること左の  
 如し  
 一 冊 五錢 十二冊 六十錢(半ヶ年分)  
 一 二十四冊 壹圓拾錢(壹ヶ年分)(郵税無料)  
 從來の購讀者に對し前金切れにも拘らず發送し來りしが、今  
 回本誌改良と共に、前金相切れ候はゞ斷然發送中止可致候間  
 此際誌代未納の諸君は至急御送金被下度候、尚八十一號より  
 は改正の定價表に基き御送金願上度候、前金拂込の購讀者諸  
 君の分は本社に於て換算可仕候右御承知被下度候  
 七月 本郷森川町一番地  
 大日本佛敎徒同盟會  
 出版部

一金三圓也 尾張 關 榮 助殿

右本會基本金の中へ御寄附被下候段謹て厚意を謝し申候  
 七月 大日本佛敎徒同盟會本部

文學博士村上專精師述

眞俗一諦辨

定價、壹冊、郵税共金拾參錢

本郷 森川町一番地

發行所 大日本佛敎徒同盟會出版部

一部十錢六部  
五十五錢十二  
部一圓郵稅共

# 無盡燈

（目要行發(七の七)日一月七）

東京巢鴨真宗大學  
内無盡燈發行所  
（電話番町五〇七  
番）

◎自我の觀念  
元良勇次郎

我を殺す者我を生  
す者 近藤純悟

◎汎神論の一  
大謬點 伊藤古川

佛教の信仰に關す  
る所感 淺井秀玄

◎日本に於ける道教  
有馬祐政

夢感聖相記 山

◎新進の窮境  
新宗教を求むる者

◎人生觀の二  
論 伊藤

◎思潮  
聖德太子の淨土教

◎馬鳴の文學  
佐々木月樵

## 第三卷第七號（七月一日發行）要目

◎自由討究  
▲有罪錄

◎精神的性命  
▲大禪師の花柳病

◎將來の宗教  
▲水嶺君足下

▲ミルトンの隱家、ヘンの會堂  
▲放言錄

# 新佛教

毎月一回一日發行  
一部定價郵稅共  
七錢五厘、半年  
分四拾五錢、一  
年分八拾六錢

▲感觸錄  
▲天然に對する人類の動作

▲將來の宗教  
▲印度國民に代り

▲客觀的宗教  
▲無罪錄

▲病間瑣言

境野黃洋

小我觀

澤柳政太郎

和田覺二

近角常觀

むねあん

わたよみ

石川成章

花田衆甫

渡邊南隱

無名氏

悠南子

杉村縱横

發行所 東京駒込  
片町十六

佛教清徒同志會